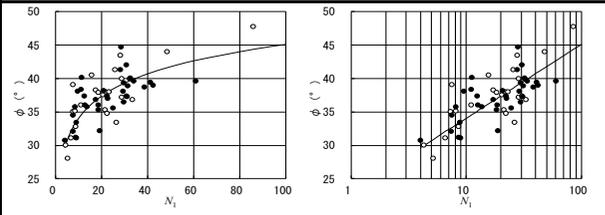
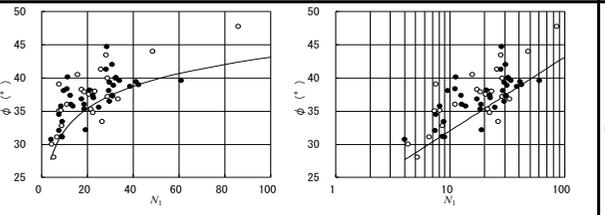
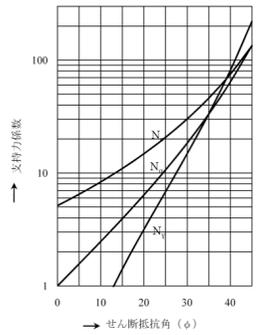
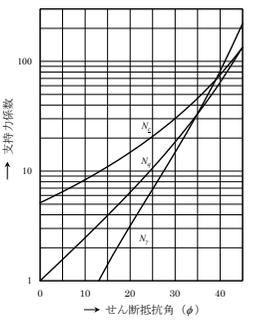


訂正箇所		誤	正	備考	摘要
ページ	行など				
88	6.3(2)解説	<p>(2) 下部構造のうち、気中にあるコンクリート部材の疲労に対する設計は、Ⅲ編6.3の規定による。また、水中・土中にある鉄筋コンクリート部材等の疲労設計も基本的にⅢ編6.3によるが、鉄筋の引張応力度については、Ⅲ編表-6.3.1によらず、この編の表-6.3.1による。これは、従来の設計法における常時の許容応力度と同じ値であり、今回の改定においても水中・土中にある部材に対しては維持管理が容易ではないことなどを考慮して、従来と同じ値が踏襲されたものである。水中・土中にあるプレストレストコンクリート部材の疲労設計も基本的にはⅢ編6.3の規定によるが、PHC杭及びSC杭については10.8.3及び10.8.4で規定されているため、これに従う必要がある。</p> <p>なお、この照査は、Ⅲ編6.3に解説されるように鉄筋コンクリート部材に配置された引張鉄筋、せん断補強鉄筋の主鉄筋を対象とし、照査に用いる作用の組合せは、Ⅰ編3.3ではなくⅢ編式(6.3.1)に対して行う。</p>	<p>(2) 下部構造のうち、気中にあるコンクリート部材の疲労に対する設計は、Ⅲ編6.3の規定による。また、水中又は地下水水位以下にある鉄筋コンクリート部材等の疲労設計も基本的にⅢ編6.3によるが、鉄筋の引張応力度については、Ⅲ編表-6.3.1によらず、この編の表-6.3.1による。これは、従来の設計法における常時の許容応力度と同じ値であり、今回の改定においても水中又は地下水水位以下にある部材に対しては維持管理が容易ではないことなどを考慮して、従来と同じ値が踏襲されたものである。プレストレストコンクリート部材の疲労設計も基本的にはⅢ編6.3の規定によるが、PHC杭及びSC杭については10.8.3及び10.8.4で規定されているため、これに従う必要がある。</p> <p>なお、この照査は、Ⅲ編6.3に解説されるように鉄筋コンクリート部材に配置された引張鉄筋、せん断補強鉄筋の主鉄筋を対象とし、照査に用いる作用の組合せは、Ⅰ編3.3ではなくⅢ編式(6.3.1)に対して行う。</p>		<p>①2018.2.21掲載 ②第2刷で訂正</p>
207	9.5.2(2)解説	<p>式(9.5.3)により算出される制限値を超えない場合には、</p>	<p>式(9.5.4)により算出される制限値を超えない場合には、</p>	「9.5.3」→「9.5.4」	<p>①2018.2.21掲載 ②第2刷で訂正</p>
210	9.5.2(2)5)iii)解説	<p>なお、支持層が砂地盤又は砂れき地盤でN値よりせん断抵抗角を推定する場合の方法については、参考資料2]に示している。</p>	<p>なお、支持層が砂地盤又は砂れき地盤でN値よりせん断抵抗角を推定する場合の方法については、参考資料1]に示している。</p>	「参考資料2」→「参考資料1」	<p>①2018.2.21掲載 ②第2刷で訂正</p>
241	10.5.2(2)2)解説	<p>① 著しい地盤沈下が現在進行中生じないこと及び将来とも予想されないこと</p>	<p>① 著しい地盤沈下が生じないこと及び将来とも予想されないこと</p>	「現在進行中生じないこと」→「生じないこと」	<p>①2018.2.21掲載 ②第2刷で訂正</p>

訂正箇所		誤		正		備考	摘要																																											
ページ	行など																																																	
321	11.2(3)解説表-解11.2.1(b)	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">照査</th> <th colspan="2">基礎全体系の照査^{*1}</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">限界状態1</td> <td rowspan="2">ケーソン基礎に塑性化を考慮しない</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>上部構造の慣性力作用位置における水平変位（基礎の降伏変位）</td> </tr> <tr> <td>照査意図</td> <td>基礎全体系の挙動の可逆性の確保</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">限界状態2</td> <td rowspan="2">ケーソン基礎に塑性化を考慮する</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>基礎の塑性率及びフーチング底面位置の回転角^{*2}</td> </tr> <tr> <td>照査意図</td> <td>基礎に生じる損傷が橋としての機能の回復が容易に行い得る程度に留まる等</td> </tr> <tr> <td colspan="2" rowspan="2">限界状態3</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>—^{*3}</td> </tr> <tr> <td>照査意図</td> <td>基礎の抵抗力の喪失防止</td> </tr> </tbody> </table> <p>*1：ケーソン本体のせん断力等の部材照査を別途実施。 *2：目安として提示。 *3：限界状態1又は限界状態2の照査で担保。</p>	照査		基礎全体系の照査 ^{*1}		限界状態1	ケーソン基礎に塑性化を考慮しない	照査に用いる工学的指標	上部構造の慣性力作用位置における水平変位（基礎の降伏変位）	照査意図	基礎全体系の挙動の可逆性の確保	限界状態2	ケーソン基礎に塑性化を考慮する	照査に用いる工学的指標	基礎の塑性率及びフーチング底面位置の回転角 ^{*2}	照査意図	基礎に生じる損傷が橋としての機能の回復が容易に行い得る程度に留まる等	限界状態3		照査に用いる工学的指標	— ^{*3}	照査意図	基礎の抵抗力の喪失防止	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">照査</th> <th colspan="2">基礎全体系の照査^{*1}</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">限界状態1</td> <td rowspan="2">ケーソン基礎に塑性化を考慮しない</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>上部構造の慣性力作用位置における水平変位（基礎の降伏変位）</td> </tr> <tr> <td>照査意図</td> <td>基礎全体系の挙動の可逆性の確保</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">限界状態2</td> <td rowspan="2">ケーソン基礎に塑性化を考慮する</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>基礎の塑性率及び基礎天端の回転角^{*2}</td> </tr> <tr> <td>照査意図</td> <td>基礎に生じる損傷が橋としての機能の回復が容易に行い得る程度に留まる等</td> </tr> <tr> <td colspan="2" rowspan="2">限界状態3</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>—^{*3}</td> </tr> <tr> <td>照査意図</td> <td>基礎の抵抗力の喪失防止</td> </tr> </tbody> </table> <p>*1：ケーソン本体のせん断力等の部材照査を別途実施。 *2：目安として提示。 *3：限界状態1又は限界状態2の照査で担保。</p>	照査		基礎全体系の照査 ^{*1}		限界状態1	ケーソン基礎に塑性化を考慮しない	照査に用いる工学的指標	上部構造の慣性力作用位置における水平変位（基礎の降伏変位）	照査意図	基礎全体系の挙動の可逆性の確保	限界状態2	ケーソン基礎に塑性化を考慮する	照査に用いる工学的指標	基礎の塑性率及び基礎天端の回転角 ^{*2}	照査意図	基礎に生じる損傷が橋としての機能の回復が容易に行い得る程度に留まる等	限界状態3		照査に用いる工学的指標	— ^{*3}	照査意図	基礎の抵抗力の喪失防止		「フーチング底面位置の回転角」→「基礎天端の回転角」	①2018.2.21掲載 ②第2刷で訂正
照査		基礎全体系の照査 ^{*1}																																																
限界状態1	ケーソン基礎に塑性化を考慮しない	照査に用いる工学的指標	上部構造の慣性力作用位置における水平変位（基礎の降伏変位）																																															
		照査意図	基礎全体系の挙動の可逆性の確保																																															
限界状態2	ケーソン基礎に塑性化を考慮する	照査に用いる工学的指標	基礎の塑性率及びフーチング底面位置の回転角 ^{*2}																																															
		照査意図	基礎に生じる損傷が橋としての機能の回復が容易に行い得る程度に留まる等																																															
限界状態3		照査に用いる工学的指標	— ^{*3}																																															
		照査意図	基礎の抵抗力の喪失防止																																															
照査		基礎全体系の照査 ^{*1}																																																
限界状態1	ケーソン基礎に塑性化を考慮しない	照査に用いる工学的指標	上部構造の慣性力作用位置における水平変位（基礎の降伏変位）																																															
		照査意図	基礎全体系の挙動の可逆性の確保																																															
限界状態2	ケーソン基礎に塑性化を考慮する	照査に用いる工学的指標	基礎の塑性率及び基礎天端の回転角 ^{*2}																																															
		照査意図	基礎に生じる損傷が橋としての機能の回復が容易に行い得る程度に留まる等																																															
限界状態3		照査に用いる工学的指標	— ^{*3}																																															
		照査意図	基礎の抵抗力の喪失防止																																															
383	12.2(3)解説表-解12.2.1(b)	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">照査</th> <th colspan="2">基礎全体系の照査^{*1}</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">限界状態1</td> <td rowspan="2">鋼管矢板基礎に塑性化を考慮しない</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>基礎の降伏</td> </tr> <tr> <td>照査意図</td> <td>基礎全体系の挙動の可逆性の確保</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">限界状態2</td> <td rowspan="2">鋼管矢板基礎に塑性化を考慮する</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>基礎の塑性率及びフーチング底面位置の回転角^{*2}</td> </tr> <tr> <td>照査意図</td> <td>基礎に生じる損傷が橋としての機能の回復が容易に行い得る程度に留まる等</td> </tr> <tr> <td colspan="2" rowspan="2">限界状態3</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>—^{*3}</td> </tr> <tr> <td>照査意図</td> <td>基礎の抵抗力の喪失防止</td> </tr> </tbody> </table> <p>*1：頂版と鋼管矢板接合部等の部材照査を別途実施。 *2：目安として提示。 *3：限界状態1又は限界状態2の照査で担保。</p>	照査		基礎全体系の照査 ^{*1}		限界状態1	鋼管矢板基礎に塑性化を考慮しない	照査に用いる工学的指標	基礎の降伏	照査意図	基礎全体系の挙動の可逆性の確保	限界状態2	鋼管矢板基礎に塑性化を考慮する	照査に用いる工学的指標	基礎の塑性率及びフーチング底面位置の回転角 ^{*2}	照査意図	基礎に生じる損傷が橋としての機能の回復が容易に行い得る程度に留まる等	限界状態3		照査に用いる工学的指標	— ^{*3}	照査意図	基礎の抵抗力の喪失防止	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">照査</th> <th colspan="2">基礎全体系の照査^{*1}</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">限界状態1</td> <td rowspan="2">鋼管矢板基礎に塑性化を考慮しない</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>基礎の降伏</td> </tr> <tr> <td>照査意図</td> <td>基礎全体系の挙動の可逆性の確保</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">限界状態2</td> <td rowspan="2">鋼管矢板基礎に塑性化を考慮する</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>基礎の塑性率及び基礎天端の回転角^{*2}</td> </tr> <tr> <td>照査意図</td> <td>基礎に生じる損傷が橋としての機能の回復が容易に行い得る程度に留まる等</td> </tr> <tr> <td colspan="2" rowspan="2">限界状態3</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>—^{*3}</td> </tr> <tr> <td>照査意図</td> <td>基礎の抵抗力の喪失防止</td> </tr> </tbody> </table> <p>*1：頂版と鋼管矢板接合部等の部材照査を別途実施。 *2：目安として提示。 *3：限界状態1又は限界状態2の照査で担保。</p>	照査		基礎全体系の照査 ^{*1}		限界状態1	鋼管矢板基礎に塑性化を考慮しない	照査に用いる工学的指標	基礎の降伏	照査意図	基礎全体系の挙動の可逆性の確保	限界状態2	鋼管矢板基礎に塑性化を考慮する	照査に用いる工学的指標	基礎の塑性率及び基礎天端の回転角 ^{*2}	照査意図	基礎に生じる損傷が橋としての機能の回復が容易に行い得る程度に留まる等	限界状態3		照査に用いる工学的指標	— ^{*3}	照査意図	基礎の抵抗力の喪失防止		「フーチング底面位置の回転角」→「基礎天端の回転角」	①2018.2.21掲載 ②第2刷で訂正
照査		基礎全体系の照査 ^{*1}																																																
限界状態1	鋼管矢板基礎に塑性化を考慮しない	照査に用いる工学的指標	基礎の降伏																																															
		照査意図	基礎全体系の挙動の可逆性の確保																																															
限界状態2	鋼管矢板基礎に塑性化を考慮する	照査に用いる工学的指標	基礎の塑性率及びフーチング底面位置の回転角 ^{*2}																																															
		照査意図	基礎に生じる損傷が橋としての機能の回復が容易に行い得る程度に留まる等																																															
限界状態3		照査に用いる工学的指標	— ^{*3}																																															
		照査意図	基礎の抵抗力の喪失防止																																															
照査		基礎全体系の照査 ^{*1}																																																
限界状態1	鋼管矢板基礎に塑性化を考慮しない	照査に用いる工学的指標	基礎の降伏																																															
		照査意図	基礎全体系の挙動の可逆性の確保																																															
限界状態2	鋼管矢板基礎に塑性化を考慮する	照査に用いる工学的指標	基礎の塑性率及び基礎天端の回転角 ^{*2}																																															
		照査意図	基礎に生じる損傷が橋としての機能の回復が容易に行い得る程度に留まる等																																															
限界状態3		照査に用いる工学的指標	— ^{*3}																																															
		照査意図	基礎の抵抗力の喪失防止																																															

訂正箇所		誤	正	備考	摘要																																														
ページ	行など																																																		
417	13.2(3)解説表-解13.2.1(b)	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">照査</th> <th colspan="2">基礎全体の照査 *1</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="4">レベル2地震動を考慮する設計状況における耐荷性能</td> <td rowspan="2">限界状態1</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>上部構造の慣性力作用位置における水平変位(基礎の降伏変位)</td> </tr> <tr> <td>照査意図</td> <td>基礎全体の挙動の可逆性の確保</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">限界状態2</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>基礎の塑性率及びフーチング底面位置の回転角 *2</td> </tr> <tr> <td>照査意図</td> <td>基礎に生じる損傷が橋としての機能の回復が容易に行い得る程度に留まる等</td> </tr> <tr> <td colspan="2">限界状態3</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>— *3</td> </tr> <tr> <td colspan="2"></td> <td>照査意図</td> <td>基礎の抵抗力の喪失防止</td> </tr> </tbody> </table> <p>* 1 : 地中連続壁のせん断力等の部材照査を別途実施。 * 2 : 目安として提示。 * 3 : 限界状態1又は限界状態2の照査で担保。</p>	照査		基礎全体の照査 *1		レベル2地震動を考慮する設計状況における耐荷性能	限界状態1	照査に用いる工学的指標	上部構造の慣性力作用位置における水平変位(基礎の降伏変位)	照査意図	基礎全体の挙動の可逆性の確保	限界状態2	照査に用いる工学的指標	基礎の塑性率及びフーチング底面位置の回転角 *2	照査意図	基礎に生じる損傷が橋としての機能の回復が容易に行い得る程度に留まる等	限界状態3		照査に用いる工学的指標	— *3			照査意図	基礎の抵抗力の喪失防止	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">照査</th> <th colspan="2">基礎全体の照査 *1</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="4">レベル2地震動を考慮する設計状況における耐荷性能</td> <td rowspan="2">限界状態1</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>上部構造の慣性力作用位置における水平変位(基礎の降伏変位)</td> </tr> <tr> <td>照査意図</td> <td>基礎全体の挙動の可逆性の確保</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">限界状態2</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>基礎の塑性率及び基礎天端の回転角</td> </tr> <tr> <td>照査意図</td> <td>基礎に生じる損傷が橋としての機能の回復が容易に行い得る程度に留まる等</td> </tr> <tr> <td colspan="2">限界状態3</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>— *3</td> </tr> <tr> <td colspan="2"></td> <td>照査意図</td> <td>基礎の抵抗力の喪失防止</td> </tr> </tbody> </table> <p>* 1 : 地中連続壁のせん断力等の部材照査を別途実施。 * 2 : 目安として提示。 * 3 : 限界状態1又は限界状態2の照査で担保。</p>	照査		基礎全体の照査 *1		レベル2地震動を考慮する設計状況における耐荷性能	限界状態1	照査に用いる工学的指標	上部構造の慣性力作用位置における水平変位(基礎の降伏変位)	照査意図	基礎全体の挙動の可逆性の確保	限界状態2	照査に用いる工学的指標	基礎の塑性率及び基礎天端の回転角	照査意図	基礎に生じる損傷が橋としての機能の回復が容易に行い得る程度に留まる等	限界状態3		照査に用いる工学的指標	— *3			照査意図	基礎の抵抗力の喪失防止	「フーチング底面位置の回転角」→「基礎天端の回転角」	①2018.2.21掲載 ②第2刷で訂正
照査		基礎全体の照査 *1																																																	
レベル2地震動を考慮する設計状況における耐荷性能	限界状態1	照査に用いる工学的指標	上部構造の慣性力作用位置における水平変位(基礎の降伏変位)																																																
		照査意図	基礎全体の挙動の可逆性の確保																																																
	限界状態2	照査に用いる工学的指標	基礎の塑性率及びフーチング底面位置の回転角 *2																																																
		照査意図	基礎に生じる損傷が橋としての機能の回復が容易に行い得る程度に留まる等																																																
限界状態3		照査に用いる工学的指標	— *3																																																
		照査意図	基礎の抵抗力の喪失防止																																																
照査		基礎全体の照査 *1																																																	
レベル2地震動を考慮する設計状況における耐荷性能	限界状態1	照査に用いる工学的指標	上部構造の慣性力作用位置における水平変位(基礎の降伏変位)																																																
		照査意図	基礎全体の挙動の可逆性の確保																																																
	限界状態2	照査に用いる工学的指標	基礎の塑性率及び基礎天端の回転角																																																
		照査意図	基礎に生じる損傷が橋としての機能の回復が容易に行い得る程度に留まる等																																																
限界状態3		照査に用いる工学的指標	— *3																																																
		照査意図	基礎の抵抗力の喪失防止																																																
536	参考資料1式(参1.1)	$\phi = 4.8 \log N_1 + 23$	$\phi = 4.8 \log N_1 + 21$	「23」→「21」	①2018.2.21掲載 ②第2刷で訂正																																														
536	参考資料1	式(参1.1)は、図-参1.1に示すように、原地盤よりサンプリングした試料から求めた三軸圧縮試験結果と原位で計測したN値から算出したN ₁ との相関関係に基づいて設定したものである。	式(参1.1)は、図-参1.1に示すように、原地盤よりサンプリングした試料から求めた三軸圧縮試験結果と原位で計測したN値から算出したN ₁ との相関関係に基づいて、その統計的なばらつきを考慮して設定したものである。	「、その統計的なばらつきを考慮して」を追記	①2018.2.21掲載 ②第2刷で訂正																																														
536-537	参考資料1	<u>なお、砂のせん断抵抗角φに関する従来の参考資料では、φとN₁の相関関係に対し、一定の安全余裕を考慮して平均値よりも小さめのφが得られるように設定された式を示していた。一方、今回の改定では、設計計算において平均的な挙動が得られるような値を地盤定数の特性値とすることが4.2で規定されたことに伴い、φの平均値を与える式として、式(参1.1)を示している。</u>	(削除)		①2018.2.21掲載 ②第2刷で訂正																																														

訂正箇所		誤		正		備考	摘要																																																																																																																																																								
ページ	行など																																																																																																																																																														
537	参考資料1 図-参1.1			図中の曲線、直線の修正		①2018.2.21掲載 ②第2刷で訂正																																																																																																																																																									
3	1.3解説 表-解1.3.1	計算値の最小位		計算値の最小値		「位」→「値」に修正	①2019.1.16掲載 ②第4刷で訂正																																																																																																																																																								
231	10.2解説 表-解10.2.1(a) ii)	<p>ii) 永続作用支配状況及び変動作用支配状況における部材照査(杭体)</p> <table border="1" data-bbox="537 614 1064 917"> <thead> <tr> <th rowspan="2">照査</th> <th rowspan="2">作用力¹⁾</th> <th colspan="4">軸力及び曲げモーメント</th> <th colspan="4">せん断力</th> </tr> <tr> <th>鋼管杭及び鋼管ソイルセメント杭</th> <th>SC杭</th> <th>場所打ち杭</th> <th>PHC杭</th> <th>鋼管杭及び鋼管ソイルセメント杭</th> <th>SC杭</th> <th>場所打ち杭</th> <th>PHC杭</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>永続作用支配状況における耐荷性能の前提</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>鋼材の圧縮・引張応力度</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>鋼材のせん断応力度</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>コンクリートのせん断応力度</td> </tr> <tr> <td>照査意図</td> <td>照査意図</td> <td>耐荷性能の前提となる構造の確保</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>耐荷性能の前提となる構造の確保</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>耐荷性能の前提となる構造の確保</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">永続作用支配状況及び変動作用支配状況における耐荷性能</td> <td>限界状態1</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>鋼材の応力度(降伏強度)</td> <td>—²⁾</td> <td>—²⁾</td> <td>鋼材のせん断応力度</td> <td>—²⁾</td> <td>—²⁾</td> <td>コンクリートのせん断応力度</td> </tr> <tr> <td>照査意図</td> <td>照査意図</td> <td>部材抵抗の可逆性の確保</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>コンクリートのせん断応力度</td> </tr> <tr> <td>限界状態3</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>—³⁾</td> <td>—³⁾</td> <td>曲げモーメント(破壊抵抗曲げモーメント)</td> <td>—</td> <td>鋼材のせん断応力度</td> <td>—</td> <td>せん断力</td> </tr> <tr> <td>照査意図</td> <td>照査意図</td> <td colspan="8">部材抵抗の喪失防止</td> </tr> </tbody> </table> <p>※1: 場合によっては、これら以外の作用に対しても照査を実施(ねじりモーメントなど)。 ※2: 限界状態3の照査で照保。 ※3: 限界状態1の照査で照保。</p>		照査	作用力 ¹⁾	軸力及び曲げモーメント				せん断力				鋼管杭及び鋼管ソイルセメント杭	SC杭	場所打ち杭	PHC杭	鋼管杭及び鋼管ソイルセメント杭	SC杭	場所打ち杭	PHC杭	永続作用支配状況における耐荷性能の前提	照査に用いる工学的指標	鋼材の圧縮・引張応力度	—	—	—	鋼材のせん断応力度	—	—	コンクリートのせん断応力度	照査意図	照査意図	耐荷性能の前提となる構造の確保	—	—	—	耐荷性能の前提となる構造の確保	—	—	耐荷性能の前提となる構造の確保	永続作用支配状況及び変動作用支配状況における耐荷性能	限界状態1	照査に用いる工学的指標	鋼材の応力度(降伏強度)	— ²⁾	— ²⁾	鋼材のせん断応力度	— ²⁾	— ²⁾	コンクリートのせん断応力度	照査意図	照査意図	部材抵抗の可逆性の確保	—	—	—	—	—	コンクリートのせん断応力度	限界状態3	照査に用いる工学的指標	— ³⁾	— ³⁾	曲げモーメント(破壊抵抗曲げモーメント)	—	鋼材のせん断応力度	—	せん断力	照査意図	照査意図	部材抵抗の喪失防止								<p>ii) 永続作用支配状況及び変動作用支配状況における部材照査(杭体)</p> <table border="1" data-bbox="1142 614 1668 917"> <thead> <tr> <th rowspan="2">照査</th> <th rowspan="2">作用力¹⁾</th> <th colspan="4">軸力及び曲げモーメント</th> <th colspan="4">せん断力</th> </tr> <tr> <th>鋼管杭及び鋼管ソイルセメント杭</th> <th>SC杭</th> <th>場所打ち杭</th> <th>PHC杭</th> <th>鋼管杭及び鋼管ソイルセメント杭</th> <th>SC杭</th> <th>場所打ち杭</th> <th>PHC杭</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>永続作用支配状況における耐荷性能の前提</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>鋼材の圧縮・引張応力度</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>鋼材のせん断応力度</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>コンクリートのせん断応力度^{※4)}</td> </tr> <tr> <td>照査意図</td> <td>照査意図</td> <td>耐荷性能の前提となる構造の確保</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>耐荷性能の前提となる構造の確保</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>耐荷性能の前提となる構造の確保</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">永続作用支配状況及び変動作用支配状況における耐荷性能</td> <td>限界状態1</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>鋼材の応力度(降伏強度)</td> <td>—²⁾</td> <td>—²⁾</td> <td>鋼材のせん断応力度</td> <td>—²⁾</td> <td>—²⁾</td> <td>コンクリートのせん断応力度</td> </tr> <tr> <td>照査意図</td> <td>照査意図</td> <td>部材抵抗の可逆性の確保</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>コンクリートのせん断応力度</td> </tr> <tr> <td>限界状態3</td> <td>照査に用いる工学的指標</td> <td>—³⁾</td> <td>—³⁾</td> <td>曲げモーメント(破壊抵抗曲げモーメント)</td> <td>—</td> <td>鋼材のせん断応力度</td> <td>—</td> <td>せん断力</td> </tr> <tr> <td>照査意図</td> <td>照査意図</td> <td colspan="8">部材抵抗の喪失防止</td> </tr> </tbody> </table> <p>※1: 場合によっては、これら以外の作用に対しても照査を実施(ねじりモーメントなど)。 ※2: 限界状態3の照査で照保。 ※3: 限界状態1の照査で照保。 ※4: 10.10.2(6)の解説に示される杭頭切断によるPC鋼材の応力の減少範囲に対して適用。コンクリートのせん断応力度の制限値は表-5.2.4に記載。</p>		照査	作用力 ¹⁾	軸力及び曲げモーメント				せん断力				鋼管杭及び鋼管ソイルセメント杭	SC杭	場所打ち杭	PHC杭	鋼管杭及び鋼管ソイルセメント杭	SC杭	場所打ち杭	PHC杭	永続作用支配状況における耐荷性能の前提	照査に用いる工学的指標	鋼材の圧縮・引張応力度	—	—	—	鋼材のせん断応力度	—	—	コンクリートのせん断応力度 ^{※4)}	照査意図	照査意図	耐荷性能の前提となる構造の確保	—	—	—	耐荷性能の前提となる構造の確保	—	—	耐荷性能の前提となる構造の確保	永続作用支配状況及び変動作用支配状況における耐荷性能	限界状態1	照査に用いる工学的指標	鋼材の応力度(降伏強度)	— ²⁾	— ²⁾	鋼材のせん断応力度	— ²⁾	— ²⁾	コンクリートのせん断応力度	照査意図	照査意図	部材抵抗の可逆性の確保	—	—	—	—	—	コンクリートのせん断応力度	限界状態3	照査に用いる工学的指標	— ³⁾	— ³⁾	曲げモーメント(破壊抵抗曲げモーメント)	—	鋼材のせん断応力度	—	せん断力	照査意図	照査意図	部材抵抗の喪失防止								解説を追記	①2019.1.16掲載 ②第4刷で訂正
照査	作用力 ¹⁾	軸力及び曲げモーメント				せん断力																																																																																																																																																									
		鋼管杭及び鋼管ソイルセメント杭	SC杭	場所打ち杭	PHC杭	鋼管杭及び鋼管ソイルセメント杭	SC杭	場所打ち杭	PHC杭																																																																																																																																																						
永続作用支配状況における耐荷性能の前提	照査に用いる工学的指標	鋼材の圧縮・引張応力度	—	—	—	鋼材のせん断応力度	—	—	コンクリートのせん断応力度																																																																																																																																																						
照査意図	照査意図	耐荷性能の前提となる構造の確保	—	—	—	耐荷性能の前提となる構造の確保	—	—	耐荷性能の前提となる構造の確保																																																																																																																																																						
永続作用支配状況及び変動作用支配状況における耐荷性能	限界状態1	照査に用いる工学的指標	鋼材の応力度(降伏強度)	— ²⁾	— ²⁾	鋼材のせん断応力度	— ²⁾	— ²⁾	コンクリートのせん断応力度																																																																																																																																																						
	照査意図	照査意図	部材抵抗の可逆性の確保	—	—	—	—	—	コンクリートのせん断応力度																																																																																																																																																						
限界状態3	照査に用いる工学的指標	— ³⁾	— ³⁾	曲げモーメント(破壊抵抗曲げモーメント)	—	鋼材のせん断応力度	—	せん断力																																																																																																																																																							
照査意図	照査意図	部材抵抗の喪失防止																																																																																																																																																													
照査	作用力 ¹⁾	軸力及び曲げモーメント				せん断力																																																																																																																																																									
		鋼管杭及び鋼管ソイルセメント杭	SC杭	場所打ち杭	PHC杭	鋼管杭及び鋼管ソイルセメント杭	SC杭	場所打ち杭	PHC杭																																																																																																																																																						
永続作用支配状況における耐荷性能の前提	照査に用いる工学的指標	鋼材の圧縮・引張応力度	—	—	—	鋼材のせん断応力度	—	—	コンクリートのせん断応力度 ^{※4)}																																																																																																																																																						
照査意図	照査意図	耐荷性能の前提となる構造の確保	—	—	—	耐荷性能の前提となる構造の確保	—	—	耐荷性能の前提となる構造の確保																																																																																																																																																						
永続作用支配状況及び変動作用支配状況における耐荷性能	限界状態1	照査に用いる工学的指標	鋼材の応力度(降伏強度)	— ²⁾	— ²⁾	鋼材のせん断応力度	— ²⁾	— ²⁾	コンクリートのせん断応力度																																																																																																																																																						
	照査意図	照査意図	部材抵抗の可逆性の確保	—	—	—	—	—	コンクリートのせん断応力度																																																																																																																																																						
限界状態3	照査に用いる工学的指標	— ³⁾	— ³⁾	曲げモーメント(破壊抵抗曲げモーメント)	—	鋼材のせん断応力度	—	せん断力																																																																																																																																																							
照査意図	照査意図	部材抵抗の喪失防止																																																																																																																																																													
207	9.5.2(2)5) iii) 図-9.5.1			「N」→「Nc」に修正 ※2019.1.16、「橋、高架の道路等の技術基準の改定について」の誤字脱字の修正に伴う修正		①2019.1.16掲載 ②第4刷で訂正																																																																																																																																																									

訂正箇所		誤	正	備考	摘要
ページ	行など				
277～278	10.8.3(5)	p_t : 引張り鋼材の面積比で, $p_g/4$ として求める。 p_t : 引張り鋼材の面積比で, $p_g/4$ として求める。	p_t : 引張り鋼材の面積比で, $p_g/4$ として求める。	p_t が2つあるため一方を削除 ※2019.1.16、「橋、高架の道路等の技術基準の改定について」の誤字脱字の修正に伴う修正	①2019.1.16掲載 ②第4刷で訂正
294	10.9.4(2)1)iii)	P_{TU} : レベル2地震動を考慮する状況における杭の引抜き抵抗力の上限値 (kN)	P_{TU} : レベル2地震動を考慮する設計状況における杭の引抜き抵抗力の上限値 (kN)	「設計」の追記 ※2019.1.16、「橋、高架の道路等の技術基準の改定について」の誤字脱字の修正に伴う修正	①2019.1.16掲載 ②第4刷で訂正
421	13.5.4	地中連続壁基礎が, 11.5.4(2)を満足する場合には, 永続作用支配状況及び変動作用支配において, 水平荷重に対する抵抗の限界状態1を超えないとみなしてよい。	地中連続壁基礎が, 11.5.4(2)を満足する場合には, 永続作用支配状況及び変動作用支配状況において, 水平荷重に対する抵抗の限界状態1を超えないとみなしてよい。	「状況」の追記 ※2019.1.16、「橋、高架の道路等の技術基準の改定について」の誤字脱字の修正に伴う修正	①2019.1.16掲載 ②第4刷で訂正
110	7.4.4(1)2)解説式(解7.4.10)	$M_p = \frac{\gamma_{pL}\gamma_{qL}K_A T}{1.375} \left\{ -h + (h+a) \log \left(\frac{a+h}{a} \right) \right\}$ なお, 式(解7.4.10)におけるlog は自然対数である。	$M_p = \frac{\gamma_{pL}\gamma_{qL}K_A T}{1.375} \left\{ -h + (h+a) \log_e \left(\frac{a+h}{a} \right) \right\}$ (削除)	「log」→「log _e 」 解説文の対数表記の説明を削除	①2019.1.16掲載 ②第4刷で訂正
536	参考資料1式(参1.1)	$\phi = 4.8 \log N_1 + 21 \quad (N > 5)$ 式(参1.1)において, logは自然対数である。	$\phi = 4.8 \log_e N_1 + 21 \quad (N > 5)$ (削除)	「log」→「log _e 」 解説文の対数表記の説明を削除	①2019.1.16掲載 ②第4刷で訂正

訂正箇所		誤	正	備考	摘要
ページ	行など				
178	8.3(3)2)解説	均等係数の大きい均質な砂質土層や細粒分の多いれき質土層等を支持層とする直接基礎の場合、	均等係数の小さい均質な砂質土層や細粒分の多いれき質土層等を支持層とする直接基礎の場合、	「大きい」→「小さい」	①2019.2.26掲載 ②第4刷で訂正
538	参考資料2 図-参 2.1	浮上りのみ考慮 $\frac{M}{M_0} = 3 - 2\sqrt{\frac{\alpha}{\alpha_0}}$	浮上りのみ考慮 $\frac{M}{M_0} = 3 - 2\sqrt{\frac{\alpha_0}{\alpha}}$	$\sqrt{\frac{\alpha}{\alpha_0}} \rightarrow \sqrt{\frac{\alpha_0}{\alpha}}$	①2019.5.31掲載 ②第4刷で訂正
369	11.8.8 解説 図-解11.8.28	図-解 11.8.28 吊り桁の有効幅と配筋状態	図-解 11.8.28 パラペットの設計荷重	「吊り桁の有効幅と配筋状態」→「パラペットの設計荷重」	①2019.7.22掲載 ②第4刷で訂正

訂正箇所		誤	正	備考	摘要																																								
ページ	行など																																												
564	参考資料2 表-参 9.1	<p>表-参 9.1 杭頭剛結の計算結果に基づいて杭の断面変化位置を定める方法の例</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>場所打ち杭</th> <th>鋼管杭、鋼管ソイル セメント杭</th> <th>PHC 杭</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>断面変化後 の杭諸元</td> <td>杭頭部の軸方向鉄筋 量 A_s の 1/2 (1/2 A_s)</td> <td>1/2 M_{max} に対して満 足する諸元 ただし、杭頭部の肉 厚との差は最大 7mm まで</td> <td>1/2 M_{max} に対して満 足する諸元</td> </tr> <tr> <td>第1断面変化 断面変化の 決定方法</td> <td>①から③のうち最も 深い位置 ①最大曲げモーメン ト M_{max} の 1/2 となる 位置 (1/2 M_{max} 位置) ②地中部最大曲げ モーメントの深さ l_{mf} に 1.2 を乗じた位置 (1.2 l_{mf}) ③ 1/2 A_s にて応力度 照査を満足する位置</td> <td>①、②のうち深い位 置 ① 1/2 M_{max} 位置 ② 1.2 l_{mf}</td> <td>①、②のうち深い位 置 ① 1/2 M_{max} 位置 ② 1.2 l_{mf}</td> </tr> <tr> <td>第2断面変化 断面変化後 の杭諸元</td> <td>第2断面変化前から 鉄筋本数を変えずに、 鉄筋径の変更により 最小鉄筋量 (0.4%) を満足する鉄筋量 A_{smin}</td> <td>最小肉厚 t_{min}</td> <td>A 種の PHC 杭</td> </tr> <tr> <td>第2断面変化 断面変化の 決定方法</td> <td>A_{smin} にて応力度を満 足する位置</td> <td>t_{min} にて応力度を満 足する位置</td> <td>A 種の PHC 杭にて応 力度を満足する位置</td> </tr> </tbody> </table>		場所打ち杭	鋼管杭、鋼管ソイル セメント杭	PHC 杭	断面変化後 の杭諸元	杭頭部の軸方向鉄筋 量 A_s の 1/2 (1/2 A_s)	1/2 M_{max} に対して満 足する諸元 ただし、杭頭部の肉 厚との差は最大 7mm まで	1/2 M_{max} に対して満 足する諸元	第1断面変化 断面変化の 決定方法	①から③のうち最も 深い位置 ①最大曲げモーメン ト M_{max} の 1/2 となる 位置 (1/2 M_{max} 位置) ②地中部最大曲げ モーメントの深さ l_{mf} に 1.2 を乗じた位置 (1.2 l_{mf}) ③ 1/2 A_s にて応力度 照査を満足する位置	①、②のうち深い位 置 ① 1/2 M_{max} 位置 ② 1.2 l_{mf}	①、②のうち深い位 置 ① 1/2 M_{max} 位置 ② 1.2 l_{mf}	第2断面変化 断面変化後 の杭諸元	第2断面変化前から 鉄筋本数を変えずに、 鉄筋径の変更により 最小鉄筋量 (0.4%) を満足する鉄筋量 A_{smin}	最小肉厚 t_{min}	A 種の PHC 杭	第2断面変化 断面変化の 決定方法	A_{smin} にて応力度を満 足する位置	t_{min} にて応力度を満 足する位置	A 種の PHC 杭にて応 力度を満足する位置	<p>表-参 9.1 杭頭剛結の計算結果に基づいて杭の断面変化位置を定める方法の例</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>場所打ち杭</th> <th>鋼管杭、鋼管ソイル セメント杭</th> <th>PHC 杭</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>断面変化後 の杭諸元</td> <td>杭頭部の軸方向鉄筋 量 A_s の 1/2 (1/2 A_s)</td> <td>1/2 M_{max} に対して満 足する諸元 ただし、杭頭部の肉 厚との差は最大 7mm まで</td> <td>1/2 M_{max} に対して満 足する諸元</td> </tr> <tr> <td>第1断面変化 断面変化の 決定方法</td> <td>①から③のうち最も 深い位置 ①最大曲げモーメン ト M_{max} の 1/2 となる 位置 (1/2 M_{max} 位置) ②地中部最大曲げ モーメントの深さ l_{mf} に 1.2 を乗じた位置 (1.2 l_{mf}) ③ 1/2 A_s にて 10.8.5 に規定される杭体 の曲げモーメント による照査を行 い、その照査を満 足する位置</td> <td>①、②のうち深い位 置 ① 1/2 M_{max} 位置 ② 1.2 l_{mf}</td> <td>①、②のうち深い位 置 ① 1/2 M_{max} 位置 ② 1.2 l_{mf}</td> </tr> <tr> <td>第2断面変化 断面変化後 の杭諸元</td> <td>第2断面変化前から 鉄筋本数を変えずに、 鉄筋径の変更により 最小鉄筋量 (0.4%) を満足する鉄筋量 A_{smin}</td> <td>最小肉厚 t_{min}</td> <td>A 種の PHC 杭</td> </tr> <tr> <td>第2断面変化 断面変化の 決定方法</td> <td>A_{smin} にて 10.8.5 に規 定される杭体の曲げ モーメントによる照 査を行い、その照査 を満足する位置</td> <td>t_{min} にて 10.8.2 に規 定される杭体の曲げ モーメントによる照 査を行い、その照査 を満足する位置</td> <td>A 種の PHC 杭にて 10.8.3 に規定される 杭体の曲げモーメン トによる照査を行 い、その照査を満 足する位置</td> </tr> </tbody> </table>		場所打ち杭	鋼管杭、鋼管ソイル セメント杭	PHC 杭	断面変化後 の杭諸元	杭頭部の軸方向鉄筋 量 A_s の 1/2 (1/2 A_s)	1/2 M_{max} に対して満 足する諸元 ただし、杭頭部の肉 厚との差は最大 7mm まで	1/2 M_{max} に対して満 足する諸元	第1断面変化 断面変化の 決定方法	①から③のうち最も 深い位置 ①最大曲げモーメン ト M_{max} の 1/2 となる 位置 (1/2 M_{max} 位置) ②地中部最大曲げ モーメントの深さ l_{mf} に 1.2 を乗じた位置 (1.2 l_{mf}) ③ 1/2 A_s にて 10.8.5 に規定される杭体 の曲げモーメント による照査を行 い、その照査を満 足する位置	①、②のうち深い位 置 ① 1/2 M_{max} 位置 ② 1.2 l_{mf}	①、②のうち深い位 置 ① 1/2 M_{max} 位置 ② 1.2 l_{mf}	第2断面変化 断面変化後 の杭諸元	第2断面変化前から 鉄筋本数を変えずに、 鉄筋径の変更により 最小鉄筋量 (0.4%) を満足する鉄筋量 A_{smin}	最小肉厚 t_{min}	A 種の PHC 杭	第2断面変化 断面変化の 決定方法	A_{smin} にて 10.8.5 に規 定される杭体の曲げ モーメントによる照 査を行い、その照査 を満足する位置	t_{min} にて 10.8.2 に規 定される杭体の曲げ モーメントによる照 査を行い、その照査 を満足する位置	A 種の PHC 杭にて 10.8.3 に規定される 杭体の曲げモーメン トによる照査を行 い、その照査を満 足する位置	下線部を修正	①2019.9.9掲載 ②第4刷で訂正
	場所打ち杭	鋼管杭、鋼管ソイル セメント杭	PHC 杭																																										
断面変化後 の杭諸元	杭頭部の軸方向鉄筋 量 A_s の 1/2 (1/2 A_s)	1/2 M_{max} に対して満 足する諸元 ただし、杭頭部の肉 厚との差は最大 7mm まで	1/2 M_{max} に対して満 足する諸元																																										
第1断面変化 断面変化の 決定方法	①から③のうち最も 深い位置 ①最大曲げモーメン ト M_{max} の 1/2 となる 位置 (1/2 M_{max} 位置) ②地中部最大曲げ モーメントの深さ l_{mf} に 1.2 を乗じた位置 (1.2 l_{mf}) ③ 1/2 A_s にて応力度 照査を満足する位置	①、②のうち深い位 置 ① 1/2 M_{max} 位置 ② 1.2 l_{mf}	①、②のうち深い位 置 ① 1/2 M_{max} 位置 ② 1.2 l_{mf}																																										
第2断面変化 断面変化後 の杭諸元	第2断面変化前から 鉄筋本数を変えずに、 鉄筋径の変更により 最小鉄筋量 (0.4%) を満足する鉄筋量 A_{smin}	最小肉厚 t_{min}	A 種の PHC 杭																																										
第2断面変化 断面変化の 決定方法	A_{smin} にて応力度を満 足する位置	t_{min} にて応力度を満 足する位置	A 種の PHC 杭にて応 力度を満足する位置																																										
	場所打ち杭	鋼管杭、鋼管ソイル セメント杭	PHC 杭																																										
断面変化後 の杭諸元	杭頭部の軸方向鉄筋 量 A_s の 1/2 (1/2 A_s)	1/2 M_{max} に対して満 足する諸元 ただし、杭頭部の肉 厚との差は最大 7mm まで	1/2 M_{max} に対して満 足する諸元																																										
第1断面変化 断面変化の 決定方法	①から③のうち最も 深い位置 ①最大曲げモーメン ト M_{max} の 1/2 となる 位置 (1/2 M_{max} 位置) ②地中部最大曲げ モーメントの深さ l_{mf} に 1.2 を乗じた位置 (1.2 l_{mf}) ③ 1/2 A_s にて 10.8.5 に規定される杭体 の曲げモーメント による照査を行 い、その照査を満 足する位置	①、②のうち深い位 置 ① 1/2 M_{max} 位置 ② 1.2 l_{mf}	①、②のうち深い位 置 ① 1/2 M_{max} 位置 ② 1.2 l_{mf}																																										
第2断面変化 断面変化後 の杭諸元	第2断面変化前から 鉄筋本数を変えずに、 鉄筋径の変更により 最小鉄筋量 (0.4%) を満足する鉄筋量 A_{smin}	最小肉厚 t_{min}	A 種の PHC 杭																																										
第2断面変化 断面変化の 決定方法	A_{smin} にて 10.8.5 に規 定される杭体の曲げ モーメントによる照 査を行い、その照査 を満足する位置	t_{min} にて 10.8.2 に規 定される杭体の曲げ モーメントによる照 査を行い、その照査 を満足する位置	A 種の PHC 杭にて 10.8.3 に規定される 杭体の曲げモーメン トによる照査を行 い、その照査を満 足する位置																																										
68	5.2.1(1)1)解説	ここで、最大抵抗曲げモーメントは、Ⅲ編5.8.1に規定される破壊抵抗曲げモーメントの特性値として計算してよい。	ここで、最大抵抗曲げモーメントは、Ⅲ編5.7.1に規定される破壊抵抗曲げモーメントの特性値として計算してよい。	「5.8.1」→「5.7.1」	①2019.11.25掲載 ②第4刷で訂正																																								

訂正箇所		誤	正	備考	摘要
ページ	行など				
123	7.7.1解説	<p>(a) 地震の影響を考慮しない設計状況</p>	<p>(a) 地震の影響を考慮しない設計状況</p>	下線部を修正	①2021.01.05掲載 ②第5刷で訂正
		<p>(b) 地震の影響を考慮する設計状況</p>	<p>(b) 地震の影響を考慮する設計状況</p>		
81	5.2.7(1) 2) 解説	Ⅲ編式(5.4.1)中の $1.15/d$ に代わってaを用いる必要がある(図-解5.2.3 参照)。	Ⅲ編式(5.4.1)中の $d/1.15$ に代わってaを用いる必要がある(図-解5.2.3 参照)。	「 $1.15/d$ 」→「 $d/1.15$ 」	①2021.01.05掲載 ②第5刷で訂正

訂正箇所		誤	正	備考	摘要																																																																						
ページ	行など																																																																										
141	7.7.4(5)解説	$S_s = n A_w \sigma_{sy}$ …………… (解7.7.9) ここに, S_s : せん断補強鉄筋が負担できるせん断力の合計の特性値(N) A_w : せん断補強鉄筋の断面積 (mm ²) σ_{sy} : せん断補強鉄筋の降伏強度の特性値 (N/mm ²) n : 図-解7.7.14 の斜線部分に配置されたせん断補強鉄筋の本数	$S_s = k n A_w \sigma_{sy}$ …………… (解7.7.9) ここに, S_s : せん断補強鉄筋が負担できるせん断力の合計の特性値(N) A_w : せん断補強鉄筋の断面積 (mm ²) σ_{sy} : せん断補強鉄筋の降伏強度の特性値 (N/mm ²) k : 補正係数で1.30とする。 n : 図-解7.7.14 の斜線部分に配置されたせん断補強鉄筋の本数	下線部を修正	①2021.01.05掲載 ②第5刷で訂正																																																																						
170	表-解8.2.2	<table border="1"> <thead> <tr> <th>基礎形式</th> <th colspan="4">設計法の適用範囲を表す βL_e の目安</th> </tr> <tr> <td>直接基礎</td> <td>1</td> <td>2</td> <td>3</td> <td>4</td> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>杭基礎</td> <td></td> <td>←</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>ケーソン基礎</td> <td>←</td> <td></td> <td>→</td> <td></td> </tr> <tr> <td>鋼管矢板基礎</td> <td>←</td> <td></td> <td>→</td> <td></td> </tr> <tr> <td>地中連続壁基礎</td> <td>←</td> <td></td> <td>→</td> <td></td> </tr> <tr> <td>深礎基礎</td> <td>←</td> <td></td> <td>→</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	基礎形式	設計法の適用範囲を表す βL_e の目安				直接基礎	1	2	3	4	杭基礎		←			ケーソン基礎	←		→		鋼管矢板基礎	←		→		地中連続壁基礎	←		→		深礎基礎	←		→		<table border="1"> <thead> <tr> <th>基礎形式</th> <th colspan="4">設計法の適用範囲を表す βL_e の目安</th> </tr> <tr> <td>直接基礎</td> <td>1</td> <td>2</td> <td>3</td> <td>4</td> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>杭基礎</td> <td></td> <td>←</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>ケーソン基礎</td> <td>←</td> <td></td> <td>→</td> <td></td> </tr> <tr> <td>鋼管矢板基礎</td> <td>←</td> <td></td> <td>→</td> <td></td> </tr> <tr> <td>地中連続壁基礎</td> <td>←</td> <td></td> <td>→</td> <td></td> </tr> <tr> <td>深礎基礎</td> <td>←</td> <td></td> <td>→</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	基礎形式	設計法の適用範囲を表す βL_e の目安				直接基礎	1	2	3	4	杭基礎		←			ケーソン基礎	←		→		鋼管矢板基礎	←		→		地中連続壁基礎	←		→		深礎基礎	←		→		図中の杭基礎の矢印の開始位置 ($\beta L_e \leq 1$) の修正	①2021.01.05掲載 ②第5刷で訂正
基礎形式	設計法の適用範囲を表す βL_e の目安																																																																										
直接基礎	1	2	3	4																																																																							
杭基礎		←																																																																									
ケーソン基礎	←		→																																																																								
鋼管矢板基礎	←		→																																																																								
地中連続壁基礎	←		→																																																																								
深礎基礎	←		→																																																																								
基礎形式	設計法の適用範囲を表す βL_e の目安																																																																										
直接基礎	1	2	3	4																																																																							
杭基礎		←																																																																									
ケーソン基礎	←		→																																																																								
鋼管矢板基礎	←		→																																																																								
地中連続壁基礎	←		→																																																																								
深礎基礎	←		→																																																																								
456	解14.6.1	$R_q = \frac{W(\cos \alpha_s + \sin \alpha_s + \tan \phi) + cA}{\sin \alpha_s - \cos \alpha_s \tan \phi}$	$R_q = \frac{W(\cos \alpha_s + \sin \alpha_s \tan \phi) + cA}{\sin \alpha_s - \cos \alpha_s \tan \phi}$	「+」を削除	①2021.01.05掲載 ②第5刷で訂正																																																																						
33	参考文献	13) 龍岡文夫, 渋谷啓三: 三軸試験と原位置試験法との関連(変形特性について), 三軸試験法に関するシンポジウム, (社)土質工学会, 1991.	13) 龍岡文夫, 渋谷啓: 三軸試験と原位置試験法との関連(変形特性について), 三軸試験法に関するシンポジウム, (社)土質工学会, 1991.	「啓三」→「啓」	①2021.01.05掲載 ②第5刷で訂正																																																																						